



三角縁神獣鏡

伝・椿井大塚山古墳（京都府木津川市）出土
古墳時代前期（3世紀）

周縁の断面が三角形状に突出し、内側に神仙や霊獣を表現することに特徴がある三角縁神獣鏡の破片。2点の破片は同一個体と推定され、このうちの内区片には、大きく口を開け、後方に脚を伸ばす獣像を確認できる。鏡面に貼られたラベルには、現在は読み取れないが「椿井」の注記があったと言われており、これを信じると、32面の三角縁神獣鏡が出土した椿井大塚山古墳からの出土資料ということになる。銅鏡には同じ型から作られた同範鏡が数点ずつ存在するが、三角縁神獣鏡の同範鏡が畿内を中心に各地に分布する点と、邪馬台国の卑弥呼へ「銅鏡百枚」が与えられたとする魏志倭人伝の記載とを結び付けることが、邪馬台国が畿内に存在したとする学説の主要な論拠となっている。本資料の同範鏡は、黒塚古墳（奈良県天理市）、コヤダニ古墳（兵庫県洲本市）、古富波古墳（滋賀県野洲市）、平川大塚古墳（静岡県菊川市）から見つかっており、ここから、神像3体・獣像2体を描き、「吾作」に始まる36字の銘文を持つ鏡であることが判明する。



背景：黒塚古墳出土 23号鏡